

2 高本の万治3年銘庚申塔とそのスタイル「三猿三面彫塔」の広がり

藤 由美

はじめに

八千代市の吉橋は、現在、「緑が丘西」地区の新しい住宅街が広がっているが、その西端の高本八幡宮の入口の9基並んだ庚申塔群の右端に、八千代市内最古の「万治三年」（1660）銘庚申塔がある。

万治に遡る庚申塔は、千葉県内、さらに関東でも希少であるだけでなく、笠付角柱型の正面と左・右面の下部に三猿が一匹ずつ浮き彫りされたこの庚申塔のスタイルは、各地域でも、江戸時代初期の貴重な最古級の三猿庚申塔として扱われている事例も多い。

三猿庚申塔の成立を辿りながら、元祖 高本の万治3年銘庚申塔のスタイルを「三猿三面彫塔」と名付け、その広がりを近隣から、さらに関東へと追ってみたい。

1. 高本の万治3年銘庚申塔の概要

吉橋の高本八幡宮前の万治3年銘庚申塔（表1）は、総高140cm、笠と塔身は一石で彫りだされ台石に載る。笠は切妻の唐破風で宝珠はつかない。台石には反花座はつかず、手前へ半円状に突き出た蓮華文様の水鉢が付き、その両脇に花立用の穴がある。

光背型の花頭窓風に窪ませた郭内には、「万治三天庚子十月吉日 為庚申待現當二世悉地成就處 講人数十八一結諸衆 敬白」の銘文、下部には、三面に三猿を一匹ずつ浮き彫りし、各猿像の下に「市左エ門」など6名ずつ18名の人名を刻んでいる（注1・2）。

石塔正面の見ざる・左面の聞かざる・右面の言わざるの三猿像の像容は、写実的で丸彫に近く、笠・塔身・台座のバランスもよく、青面金剛が主尊として定着する以前の三猿主体の庚申塔としてたいへん優れた石塔である。

2. 江戸初期の三猿像付き庚申塔の成立

室町時代から、「庚申待供養」などの文字と、阿弥陀三尊や山王廿一社など信仰する様々な主尊の梵字を彫った中世板碑が各地で祀られ、現在に伝わっている。

近世に入っても、寛永年間までの庚申塔は、この中世板碑の形態を踏襲し、上部二条線を半円形に湾曲し、下部に蓮華を施した板碑型石塔に、願文と梵字を彫り込んだ文字塔が主流であった。

猿像が現れるのは、東京都北区宝幢院の寛永16年（1639）銘板碑型の阿弥陀像山王廿一社塔（表2①）で、主尊を拝む横向きの猿2匹が脇侍として刻まれているが、「庚申」の銘がないので、猿像付き庚申塔の初見とするかは、研究者の意見が分かれる。

この山王系の向かい合わせの二猿像付きの板碑型庚申塔は、この後、寛永18年以降から日光付近に多くみられるようになり「日光型」と呼ばれている（注3・4・5）。

表 1 吉橋の高本八幡宮前の万治 3 年銘庚申塔の写真と銘文

	左面	正面	右面
	(梵字) 為庚申待現当二世悉地成就処 講人数十八一結諸衆 万治三天 ^庚 子十月吉日		
	敬 白		
聞かざる (不聞猿) 像	見ざる (不見猿) 像	言わざる (不言猿) 像	
新十郎 三良右 又〇郎 甚四郎 勘十郎 与七郎	庄十良 吉兵衛 彦次 六左工門 半左工門 惣七	新藏 惣九郎 惣十郎 佐五良 四良右 市左工門	

		
	左面 (不聞) 正面 (不見) 猿像	正面下部 人名銘文
		
左面下部 人名銘文	右面下部 人名銘文	

続いて、寛永 17 年（1640）神奈川県茅ヶ崎市輪光寺の光背型三猿塔（表 2②）が現れる。この塔の三猿は烏帽子をかぶり、中央上部に聞かざる、右下に言わざる、左下に見ざるを三角形の配置で浮き彫りしている。「庚申」銘はなく、「六与供養觀（六たび供養をくみしてすすめれば）・・・」の銘から、年 6 回の庚申待を意味するという見解で三猿付き庚申塔の初見とみなす説もある一方で、この時期の三猿登場は早すぎるとの見解から、紀年銘改刻説など議論も一時かわされていた（注 3）。

寛永 11 年（1634）発刊の『尤の草子』に京都の栗田口にあった庚申堂に不見猿・不言猿・不聞猿の三猿が三角形の配置で祀られていたことが、書かれていることから、この輪光寺の三猿塔は、関東の山王系の二猿像塔とは由来を異にする関西系の三猿像をモデルにした塔であると、大畠洋一氏は述べている。栗田口の庚申堂は、当初は三猿のみを祀る「三申堂」で、後に青面金剛像が安置されたことにより、「庚申堂」と呼ばれるようになったという（注 6）。

不見猿・不言猿・不聞猿の三猿を祀る信仰は最澄の時代から存在し、最初から三猿が庚申信仰と結びついていたわけではなかった。

庚申待をする日が、干支の庚申の「申」の夜で、庚申待が明ける翌朝が「酉」の日であることから、猿と鶏が庚申塔の造形に表現された。また関東では庚申信仰と山王信仰は密接であったことから、山王神社のお使いの猿が庚申と結びつく。さらに関西をルーツとする三猿信仰が関東にもたらされて、寛永期の終わりごろ、庚申塔と三猿像は不可分になったという説（注 6）が考えられている。

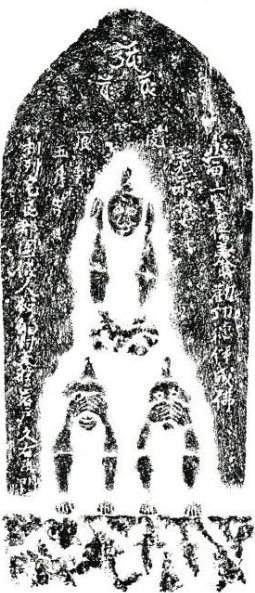
もっとも、正保から寛文期（1644～1672）まで、庚申塔の主尊は、阿弥陀・薬師・釈迦・大日如来や地藏・観音菩薩・青面金剛像など多様であった。中でも佐倉市先崎の、慶安 3 年（1650）銘をもつ地藏菩薩坐像庚申塔（表 2④）は、この時期最も秀逸な像容の石仏である。そして、これらの主尊の像の下に三猿が付く例もまれにみられる。

千葉県において、「庚申」の銘があり、三猿像が付く塔は、正保 3 年（1646）銘の浦安市大蓮寺の庚申塔（表 2③ 非公開）である（注 7）。三猿付き庚申塔の確実な初見とされているが、主尊はあくまでも聖観音菩薩立像であり、三猿はその下に前向きで右から不見・不言・不聞の順に横に並んで彫られている。

続いて、承応 2 年（1653）の富津市竹岡松翁院（十夜寺）の阿弥陀像塔も如来像の下に、前向きで並んで立つユニークな姿の三猿が彫られている。「庚申」の銘はないが、三猿が付くことから、富津市最古の庚申塔として、市の文化財になっている（注 8）。

三猿のみが主尊の庚申塔は、藤沢市伊勢山公園の承応 2 年（1653）塔（表 2⑤）、茅ヶ崎市龍前院の明暦 3 年（1657）銘塔（市文化財）などが早く、千葉県では、我孫子市青山八幡神社の万治 2 年（1659）銘塔（表 2⑥）がある（注 9）が、万治のころまでの庚申塔の数は少なく、さらに三猿像が付く塔はまれである。

表2 万治2年（1659）までの関東の庚申塔

 ①寛永16年（1639） 二猿付き 阿弥陀像 山王廿一社塔 北区宝幢院 （注3）	 ②寛永17年（1640） 三猿像塔 茅ヶ崎市輪光寺 （注3）	 ③正保3年（1646） 三猿付き聖観音像塔 浦安市大蓮寺 非公開（注10）
 ④慶安3年（1650） 地藏菩薩坐像塔 佐倉市先崎 「奉造立庚申人数廿五人 先崎村」	 ⑤承応2年（1653） 三猿像塔 藤沢市伊勢山公園 （注3）	 ⑥万治2年（1659） 三猿像塔 我孫子市青山八幡神社 （注11）

庚申塔の造立が村や町で盛んになるのは寛文期（1661～）からで、その半ばからは、板碑型の文字塔に加えて正面向き横並びで三猿像が並んで付く板碑型三猿像塔も次第に多くなるが、中には一猿のみや二猿、さらに一猿に一鶏や二鶏を彫った塔や、如来像や初期青面金剛像の下に横並び三猿像が付く塔もあるなど多彩である。

そのような背景の中、早くも万治3年（1660）に八千代市高本では、笠付角柱型の三猿三面彫庚申塔が造立された。他の板碑型庚申塔に比べて、高さのある豪華な造りの笠付角柱塔である。しかしその角柱正面に刻める願文や像にはスペース的に限りがあり、正面のほか両側面も活かす工夫が施され、三猿は三面に一匹ずつリアルに浮き彫りし、施主名も三面に分けて記された。まさに板碑型の平面利用から、角柱型の三面利用へと、画期的な造形の変化であった。

そして万治から寛文へと庚申塔建立が盛んになるに従い、元祖高本の三猿三面彫塔は、主流の板碑型横並び三猿像塔と肩を並べ、初期庚申塔として近隣の村にも伝わっていく。

特に八千代市内の三猿が主尊の庚申塔は、天和2年（1682）まですべてこの三猿三面彫塔の形態であり、横並びの三猿塔が現れるのは、青面金剛像に付属する大和田新田と吉橋の2基を除いて、元禄期（1688～）以降からである。

3. 「三猿三面彫塔」の近隣地域への広がり

三面各面に一猿ずつ配し、願文を刻した角柱型の三猿三面彫庚申塔を、八千代市とその隣接市で探してみると、次のように8基の類型があった。

このほか、八千代市保品庚申塚群で、紀年銘を欠くが、寛文期の造立と推定される三猿三面彫角柱型庚申塔（注12）の一部が見つかっていて、全数は高本を入れて10基となる。この10基については、筆者が実見し、銘文を確認し、写真撮影した。

（①～⑧は表3の画像、No.は表6「関東の三猿三面彫塔一覧」の通しNo.）

① No.3 寛文3年（1663）佐倉市新町嶺南寺 銘「奉造建庚申塔」。笠のない角柱型で、もともと笠がなかったのかは不明。佐倉市内では先崎の慶安3年の地藏像庚申塔に次いで古い庚申塔である。

② No.11 寛文7年（1667）印西市浦部原新田庚申塚 銘「奉造立庚申興二世安穩」を朱塗りする。笠付角柱型で、笠は宝珠を頂く。総高133cm。三猿は猿像の周りを彫り窪め、正面に不聞猿、左面に不見猿、右面に不言猿を浮き彫りにする。左右面に「江口平右門」ほか14名の氏名を記す。台石は、前へ突き出す水鉢が付く。旧印西市内では、竹袋観音堂の寛文元年（1661）銘の聖観音像の下に三猿像が付く庚申塔に次いで古い。

③ No.18 寛文10年（1670）船橋市西船五丁目路傍 正面を光背形に彫り窪め、両手で薬壺を持つ薬師如来坐像を浮き彫りする。正面の銘は「（パイ）庚申待結衆念願奉造立薬師如来 成就二世安楽攸」。さらに左右裏の各面下部に三猿を一匹ずつ刻んでいる。笠はシンプルな宝形で、台石に蓮華文様の大きな水鉢が付く。

表3 八千代市域と隣接市域の三猿三面彫庚申塔



①寛文3年(1663)
佐倉市新町嶺南寺



②寛文7年(1667)
印西市浦部原新田庚申塚



③寛文10年(1670)
船橋市西船五丁目路傍
主尊 薬師如来像
左右裏面下部に三猿



④延宝元年(1673)八千代市
萱田飯綱神社下



⑤延宝3年(1675)
白井市富ヶ谷薬師堂



⑥延宝5年(1677)
佐倉市 臼井田お猿の松



⑦天和2年(1682)
八千代市島田字通原



⑧天和2年(1682)
八千代市平戸字道地

如来像や青面金剛像が主尊の庚申塔で角柱型の場合、無理に三猿を並べて彫らず、左右正面または左右裏面に一猿ずつ配置する事例が、千葉県では芝山町の延宝9年塔のほか、天和期以降の神奈川県や東京都内の庚申塔にまれに見られるが、薬師如来を主尊とする庚申塔は千葉県内では類がない。

④ No.22 延宝元年(1673) 八千代市 萱田飯綱神社下 銘「奉造立庚申之人数石仏立之現當二世悉地所」。笠付角柱型で、首延部分がなく、笠は小ぶりの唐破風が付く。台石には水鉢はつかない。飯綱神社下のこの石塔群は、路傍などから移設されているので、元の一体の台石であるのかは不明である。角柱三面に、下部ではなく中央にそれぞれ浮彫りされた三猿像は定型化し、やや粗略な表現になる。右面には「およし おきく」など33人の女性名、左面には15名の男性名と男・女別に記し、正面には願文と「定有」と3名の男性の名がある。

⑤ No.23 延宝3年(1675) 白井市富ヶ谷薬師堂 銘「奉造立庚申為現當二世也」。宝珠を頂く宝形の笠付の角柱塔で、正面を花頭窓風に彫り窪め、願文を記す。小ぶりの水鉢付きの台石に載る。角柱の幅は奥行より長い。三猿はやや簡略型ではあるが、塔全体のバランスはよい。17人の名前が左右裏面に刻まれている。

⑥ No.28 延宝5年(1677) 佐倉市 臼井田お猿の松 佐倉道沿いの水田内の「お猿の松」と呼ばれる小島にあり、冬季以外の立ち入りができないので、銘は未読である。

⑦ No.36 天和2年(1682) 八千代市島田字通原 銘「南無妙法蓮華經」の題目を刻む庚申塔である。船橋北部から八千代市北西部は、中山法華経寺の教團の「神保領十ヵ村」で、島田と次の平戸もその地域に属している。中山門流のこの地域は、同じ日蓮宗の「七里法華」と呼ばれる上総東部地区とは異なり、願文や主尊を変えて庚申塔や月待塔などの他の宗派の信仰する石塔を柔軟に受け入れている。島田は天和2年神無月(10月)、平戸は同年11月のほぼ同時期にそれぞれこの庚申塔を初めて建立し、以後、十数基の庚申塔を建て続けている。

「嶋田村」の36人の名を刻む島田のこの塔は、宝形に唐破風のある笠付の小ぶりな角柱型で、浮彫された三猿像はリアルでユーモラスである。

⑧ No.37 天和2年 八千代市平戸字道地 銘「妙法蓮華經」。15人の名を連記、隣村の島田と同じく題目を刻む庚申塔で、その翌月の建立であるが、繊細な島田の塔とは作風は異なり、笠も大振りで、単純化された猿像もよく目立つ。幅広で奥行きはやや浅く、台石の水鉢は痕跡程度に小さくなっている。

⑨ 年不明 八千代市保品庚申塚群 銘「諸願成就二世安楽攸」。上部と台石を失っているので、紀年銘と笠が付くのかは不明。筆者は寛文期と推定する。

以上の中で、高本の笠付角柱型の形態と作風が類似するのは、印西市浦部の寛文7年塔、白井市富ヶ谷の延宝3年塔、八千代市島田の天和2年塔である。笠の形態は異なるが台石の前に突き出た水鉢は共通している。

三猿の配置は、横並びの場合は通常右から「見ざる・聞かざる・言わざる」の順で並び、まれに左からの場合があるが、三猿三面彫塔では、正面と右・左面の順をどう考えたのであろうか。西船の薬師像塔（表3③）を除く9基で検討してみた（表4）。

高本の塔では、正面を重要視して不見猿を置き、左・右面の順で不聞・不言猿を配置している。

佐倉市嶺南寺塔①では、左から不見・不聞・不言の順で配置されるので、このころまでは、左面が右面に勝ると思われたのであろうか。

白井市富ヶ谷塔⑤は正面に不見、右・左面の順に不聞・不言猿が配置されている。

平戸塔⑧のように嶺南寺塔と同じ左からの配置と例外もあるが、印西市浦部塔②からは、右面から不見・不聞・不言の順で、これが一般的なとなるようである。

表4 近隣の三猿三面彫庚申塔の猿像の配置

建立年	所在地	左面	正面	右面
1660	高本	2 不聞	1 不見	3 不言
1663	①嶺南寺	1 不見	3 不言	2 不聞
1667	②浦部	3 不言	2 不聞	1 不見
1673	④萱田	3 不言	2 不聞	1 不見
1675	⑤富ヶ谷	3 不言	1 不見	2 不聞
1677	⑥臼井田	3 不言	2 不聞	1 不見
1682	⑦島田	3 不言	2 不聞	1 不見
1682	⑧平戸	1 不見	2 不聞	3 不言
不明	⑨保品	3 不言	2 不聞	1 不見

4. 関東での三猿三面彫塔およびその種類の分布と特徴

万治3年銘高本庚申塔の特徴である三猿三面彫塔の類型を、関東地方に広げて探し、報告書や Web サイトで紀年銘、願文銘のほか、拓本や写真で形態が明瞭に確認できる庚申塔のみを抽出し、一覧表（表6）にまとめた。

千葉・東京・神奈川・埼玉の都県で計63基が確認され、半数の32件は神奈川県域、ついで東京都域の15件、千葉県域の12件であった。

そのうち寛文期までの三猿三面彫塔は、その地域で最古の庚申塔であることが多く、貴重な石造文化財として、横浜市泉区の寛文6年塔・東京都江東区の寛文8年塔・藤沢市の寛文9年塔・横浜市青葉区の延宝5年石幢・葉山町の元禄元年青面金剛像塔は、各自治体の有形文化財に指定されている。

このうち、横浜市洪沢稲荷の寛文元年（1661）塔（表5①）は、江戸初期に特徴的な縦長の宝篋印塔の塔身三面に三猿を浮き彫りする。この猿像は大きく丸彫りに近い。

ついで厚木市戸田の寛文4年（1664）銘塔（表5②）は、反花座の上に角柱を立て、笠を被せて擬宝珠を置く大型の塔で、三面上部を駒形に浅く彫りくぼめて三猿を刻む。下段の区画には光明真言の梵字や銘文がある。

平塚市寄木神社の寛文4年銘塔（表5③）は反花座や笠部が高い総高が3mの大型の塔である。これ以後は、猿像が角柱下部に配置される形態となる。

表5 関東地域の三猿三面彫庚申塔

			
①No. 2 (注12) 寛文元年 (1661) 横浜市鶴見区洪沢稲荷	②No. 5 (注14) 寛文4年 (1664) 厚木市戸田八幡神社	③No. 6 (注15) 寛文4年 (1664) 平塚市大神寄木神社	④No. 10 (注16) 寛文6年 (1666) 横浜市泉区御霊神社 市文化財
			
⑤No. 14 寛文8年 (1668) 江東区亀戸普門院 区文化財	⑥No. 16 (注17) 寛文9年 (1669) 藤沢市藤沢常光寺 市文化財	⑦No. 55 (注18) 元禄16年 (1703) 文京区本駒込天祖神社	⑧No. 63 (注19) 安永元年 (1772) 南房総市府中宇台路傍

表6 関東地域の三猿三面彫庚申塔一覧 (注 20)

No	年銘	西暦	所在都県	所在地市	所在地	銘文・特徴
1	万治3	1660	千葉	八千代市	吉橋・高本八幡社	「為庚申待現當二世悉地成就処」
2	寛文元	1661	神奈川	横浜市	鶴見区洪沢稲荷	宝篋印塔 「奉新造庚辛構供養之菩提也」
3	寛文3	1663	千葉	佐倉市	新町嶺南寺	「奉造建庚申塔」
4	寛文3	1663	埼玉	鴻巣市	本町8 勝願寺	三猿一鶏の線画
5	寛文4	1664	神奈川	厚木市	戸田 八幡神社	「奉造立為庚申供養石塔二世安楽也」
6	寛文4	1664	神奈川	平塚市	大神 寄木神社	右面の猿は消失 高さ3m
7	寛文4	1664	東京	足立区	千住仲町 源長寺	主尊=阿弥陀坐像「奉造立庚申供養」
8	寛文5	1665	神奈川	平塚市	出縄 個人宅	四面に山王二十一仏の種子
9	寛文5	1665	埼玉	妻沼町	善ヶ島 竜泉寺	「奉口庚申」
10	寛文6	1666	神奈川	横浜市	泉区中田町御霊神社	「南無阿弥陀仏」
11	寛文7	1667	千葉	印西市	浦部原新田庚申塚	「奉造立庚申興二世安穩」
12	寛文8	1668	神奈川	二宮町	山西（非公開）	「為奉納山王供養菩提也」
13	寛文9	1669	神奈川	伊勢原市	高森 稲荷神社	「常兩〔 〕庚申」
14	寛文8	1668	東京	江東区	亀戸3丁目普門院	「奉造立庚申結衆二世安楽処」
15	寛文8	1668	東京	世田谷区	森厳寺	笠欠 上部に猿像
16	寛文9	1669	神奈川	藤沢市	本町常光寺	阿弥陀三尊種子「南無阿弥陀佛」
17	寛文10	1670	埼玉	吉川市	定勝寺	石灯籠竿部三面に一猿ずつ三猿
18	寛文10	1670	千葉	船橋市	西船五丁目墓地脇	主尊=薬師如来像「庚申待結衆念願」
19	寛文11	1671	神奈川	逗子市	逗子5 亀岡八幡宮	主尊=青面金剛像
20	寛文12	1672	神奈川	愛川町	中津 半縄	「庚申預今月今日奉作供養」
21	寛文13	1673	神奈川	横浜市	泉区中川地区センター	主尊=阿弥陀如来立像
22	延宝元	1673	千葉	八千代市	萱田 飯綱神社下	「奉造立庚申之人数石仏立之現當二世悉地所」
23	延宝3	1675	千葉	白井市	富ヶ谷薬師堂	「奉造立庚申為現當二世也」
24	延宝3	1675	東京	文京区	大円寺	「奉石造庚申供養之塔」
25	延宝4	1676	東京	豊島区	高田2 金乗院	「奉建立庚申塔婆二世安楽攸」
26	延宝5	1677	神奈川	横浜市	青葉区 宗英寺	石幢一對 幢身3面に三猿の猿
27	延宝5	1677	神奈川	小田原市	飯泉観音	〔奉造立更新供養悉口成就〕
28	延宝5	1677	千葉	佐倉市	臼井田お猿の松	（銘文未読）
29	延宝6	1678	東京	渋谷区	千駄ヶ谷 延命寺	「奉寄進庚申供養」
30	延宝8	1680	東京	渋谷区	千駄ヶ谷 延命寺	主尊=青面金剛像
31	延宝8	1680	神奈川	鎌倉市	笛田中志房	「奉造立庚申供養」

32	延宝 8	1680	神奈川	小田原市	久野 京福寺	「奉修庚申侍供養 為二世安樂」
33	延宝 8	1680	千葉	木更津市	吾妻神社	「奉供養新庚申 為二世安樂也」道標付
34	延宝 8	1680	東京	台東区	下谷小野照崎神社	六角柱「小野崎大明神寶前」
35	延宝 8	1680	千葉	芝山町	山中 宝樹寺跡	主尊=青面金剛像「奉造立庚申□□」
36	天和 2	1682	千葉	八千代市	島田字通原	「南無妙法蓮華經」
37	天和 2	1682	千葉	八千代市	平戸字道地	「妙法蓮華經」
38	天和 3	1683	埼玉	さいたま市	西区 塚本神明神社	主尊=青面金剛像 2基1対 「奉造立庚申為二世安樂也」
39	天和 3	1683	神奈川	鎌倉市	二階堂 681	主尊=阿弥陀像「奉造立庚申供養敬白」
40	天和 3	1683	神奈川	秦野市	渋沢 喜叟寺	「山王大権現」 「奉造立庚申供養」
41	天和 4	1684	神奈川	鎌倉市	材木座五所神社	主尊=来迎相阿弥陀如来像
42	貞享 3	1686	神奈川	横浜市	戸塚区吉田町八幡神社	主尊=青面金剛像 左右裏面に猿像
43	貞享 4	1687	神奈川	伊勢原市	日向 淨苑願寺	「南無阿弥陀仏」木食空譽筆
44	貞享 5	1688	神奈川	藤沢市	藤沢 庚申堂	「奉建立庚申塔」
45	元禄元	1688	神奈川	葉山町	長柄 1536	主尊=青面金剛像 「信心渴仰庚申塔婆二世安樂所」
46	元禄 2	1689	神奈川	茅ヶ崎市	十間坂大六天神社	
47	元禄 3	1690	神奈川	平塚市	上平塚八雲神社	「奉供養庚申」（蓮の浮彫）
48	元禄 3	1690	神奈川	寒川町	医王院	
49	元禄 4	1691	東京	中野区	中央慈眼寺	主尊=青面金剛像
50	元禄 5	1692	神奈川	小田原	久野 大畑観音堂	「奉修庚申侍供養」
51	元禄 6	1693	東京	目黒区	上目黒 宿山	主尊=青面金剛像 「奉尊躰庚申供養二世為安樂也」
52	元禄 6	1693	神奈川	大磯町	大磯 日枝神社	正面に青面金剛像
53	元禄 6	1693	神奈川	藤沢市	本町 4 莊源寺	「奉造立石塔一基」
54	元禄 6	1693	東京	武蔵村山市	三ツ木 慈眼寺	主尊=青面金剛像 左右裏面に猿像
55	元禄 16	1703	東京	文京区	本駒込 3 天祖神社	「奉待庚申為二世安樂」
56	宝永 3	1706	神奈川	相模原市	田名 でえの坂	主尊=青面金剛像 （風化）
57	正徳元	1711	神奈川	相模原市	田名 5686	主尊=青面金剛像 「奉彫刻庚申塔」
58	享保 2	1717	東京	町田市	常盤 日枝神社	主尊=青面金剛像 「同行十三人」
59	享保 3	1718	神奈川	二宮町	西茶屋薬師堂前	「奉造立庚申供養塔」「国家安全」
60	享保 4	1719	東京	町田市	上小山田神明神社付近	主尊=阿弥陀像「奉造立庚申供養」
61	享保 12	1727	東京	世田谷区	南烏山 2 烏山神社	山状角柱型 上部に三猿
62	宝暦 3	1753	神奈川	相模原市	田名旧大山街道路傍	「□～□郡渋谷庄田名村」
63	安永元	1772	千葉	南房総市	府中宇台 路傍	

神奈川県域の三猿三面彫塔は、寛文元年の宝篋印塔をルーツとし、そのバリエーションと考えられるユニークで大型の笠付角柱型を経て、横浜市泉区中田御霊神社の寛文6年塔（表5④）の一般的な笠付角柱型に落ち着き、東海道沿いや大山街道沿いの村や宿場町に普及していく。

寛文5年から天和期（1665～1683）までのその形態は、北総の高本の万治3年塔およびその類型とあまり変わらないが、元禄期（1688～）からは、文京区本駒込天祖神社の元禄16年（1703）塔（表5⑦）のように、日月が付き、高さが低くなる塔が見られる。

やがて、八千代市とその近隣では、貞享期（1684～）から青面金剛像の下に横並びの三猿を伴う一般的な庚申塔となり、形態も幅広の笠付角柱型や駒型に変化し、天和2年（1682）の2基の題目庚申塔を最後に、三猿三面彫塔はその姿を消す。

一方、神奈川県・東京都域では、主尊に青面金剛像が盛んに登場してくる貞享期以降も、角柱の正面に主尊の青面金剛像、その下と左右面、または裏面と左右面に三猿を一猿ずつ彫る塔が享保4年（1719）ごろまで残る。

享保期（1716～）以降の三猿三面彫塔は極めて少ないが、千葉県南房総市では、安永元年（1772）銘の三猿塔（表5⑥）が見つかっている。現在の調査では、この南房総市中宇台路傍の例が三猿三面彫庚申塔の最新である。

おわりに

八千代市最古の高本の庚申塔について、その形態のルーツを求めて北総地域を調べたが、高本の塔より古い三猿三面彫庚申塔が見つからず、関東に地域を広げて調べてみたところ、意外にも神奈川県・東京都域に、高本の庚申塔に次ぐ寛文期の三猿三面彫庚申塔が多く残っていることがわかった。

しかも、神奈川県域では、横浜市内の寛文元年（1661）の三猿を持つ宝篋印塔を原型として、背が高く反花座を伴うなど宝篋印塔の名残を留める三猿三面彫庚申塔が厚木市と平塚市域にあることがわかった。相模地方では同時期、北総とは系譜を異にして三猿三面彫庚申塔が成立したと推定されるが、寛文6年（1666）以降は、江戸府内を含めて南関東全域でその形態に大きな差は見られなくなり、江戸時代前期の石造物として定着したと考えられる。

万治3年（1660）の高本の庚申塔は、八千代市とその隣接市域の北総9基の三面彫庚申塔の元祖であり、高本から近隣への面的な広がりとは確認できるが、万治3年以前のその前身は不明である。系譜を遡る手掛かりは、神奈川県域の寛文初期の塔の台石が反花座を持つこと対して、高本とその近隣の塔の台石が水鉢を有することから、北総では笠付角柱型の墓塔や供養塔をその祖型としたのかもしれない。

近世初期の三猿付き庚申塔の成立と広がりを考察する際、高本の万治3年庚申塔の持つ歴史的文化的価値は重要である。貴重な石造文化財として、地域と行政による保存と

その意義の普及が的確になされることを期待したい。

最後に、三猿三面彫庚申塔の十数例のリストを作成しご教示くださった多摩野佛研究会の石川博司氏、南房総市の安永元年庚申塔を調査し画像を送ってくださった房総石造文化財研究会会長早川正司氏、浦安市大蓮寺の三猿付き聖観音像塔の最新の調査資料と鮮明な画像を提供してくださった浦安市郷土博物館の職員皆様、高本八幡宮氏子代表の生目田政明氏に、心からの感謝の意を表します。

注

1. 蔵由美「吉橋の庚申塔について」『史談八千代』第 39 号 八千代市郷土歴史研究会 2014 年、及び「吉橋高本の万治三年庚申塔銘文と記事の訂正について」『史談八千代』第 40 号 2015 年
2. 蔵由美「八千代市最古の万治三年銘の三猿付角柱型庚申塔とその類型塔」『会報』第 142 号房総石造文化財研究会 2019 年
3. 縣敏夫『図説 庚申塔』 揺籃社 1999 年
4. 『日本石仏図典』日本石仏協会編 国書刊行会 1986 年
5. 『日本石仏事典』庚申懇話会編 雄山閣 1980 年
6. 大畠洋「三猿庚申塔」＜石仏ライブラリ <http://koktok.web.fc2.com/index.htm>
7. 『浦安の石造物 浦安市文化財調査報告 第四集』千葉県浦安市教育委員会 1997 年
8. 「市宝探訪（石造物）」＜富津市HP
9. 『我孫子の庚申塔』我孫子市史研究センター合同部会 2000 年
10. 浦安市郷土博物館からの提供画像。本石塔は一般公開していないので、大蓮寺への問い合わせはご遠慮くださいとのことである。
11. 「石仏神心」<http://sekibutu.blogspot.com/>
12. 蔵由美「八千代市保品庚申塚群の石造物」『史談八千代』第 45 号 2020 年 本誌
13. 「東京・神奈川の庚申塔」<http://yama51km.livedoor.blog/>
14. 「茅ヶ崎郷土会」<http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/>
15. 「寄木神社」＜「神社探訪」<http://www.komainu.org/index.html>
16. 「電子博物館・みゆネットふじさわ」＜藤沢市 HP
17. 「庚申塔と庚申待」＜いずみいまむかし一泉区小史＜横浜市HP
18. 「四季歩のつれづれ」<http://tamtom.blog44.fc2.com/>
19. 早川正司氏からの提供画像
20. 表 6 「関東地域の三猿三面彫庚申塔一覧」の参考資料と Web サイト
 - ・石川博司『千葉県庚申塔事典（テスト版）』 庚申資料刊行会 2019 年
 - ・『千葉県石造文化財調査報告』千葉県教育委員会 1980 年
 - ・「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅲ石造文化財』八千代市 2006 年

- ・『船橋市の石造文化財 船橋市史資料（一）』船橋市 1984 年
- ・『白井町石造物調査報告書第 1 集』白井町教育委員会 1986 年
- ・『印西町石造物第六集 永治地区調査報告書』印西町教育委員会 1989 年
- ・「87 道標」『続房総の石仏百選』房総石造文化財研究会 たけしま出版 2010 年
- ・『足立区文化財調査報告書 庚申塔編』足立区教育委員会 昭和 61 年
- ・「埼玉県の古い庚申塔」<http://fukadasoft2.sakura.ne.jp/>
- ・「神奈川県庚申塔」<http://tatsu024633.livedoor.blog/>
- ・「東京都庚申塔」<http://tatsu024632.livedoor.blog/>
- ・「石仏に会いに行く」＜「風に誘われて」 <http://kazesasou.com/index.html>
- ・「道しるべ」<https://ameblo.jp/miki2343/>
- ・「私家版 さいたまの石仏」<https://plaza.rakuten.co.jp/itasan31078/>
- ・「石造物探訪」＜「時々関心！」 <http://toppa10.web.fc2.com/index.html>
- ・「お地蔵さんの石仏あれこれ日記」<https://air.ap.teacup.com/ozizousan/>
- ・「ぼのぼのぶろぐ」<http://nakano3bono.cocolog-nifty.com/blog/>
- ・「石仏探訪」＜寺田縄情報局 <http://teradanawa.web.fc2.com/page-33.html>
- ・「寒川町庚申塔一覧」＜「SAMUKAWA-Machi Guid」<https://samkajyoho.exblog.jp/>
- ・「葉山の文化財」＜葉山まちづくり協議会HP
- ・「平塚・石仏めぐり-旧市内編-(4・旧平塚宿)庚申塔」＜平塚市博物館HP
- ・「路傍の石仏」＜バーチャル郷土館＜二宮町HP
- ・「武蔵村山市指定文化財」＜武蔵村山市HP

追記

表 6 「関東地域の三猿三面彫庚申塔一覧」に加筆します。

11-2	寛文 11	1671	神奈川	平塚市	高根 359 路傍	「青面金剛」「如我〇所願/今者己満足」
46-2	元禄 2 カ	1689	千葉	野田市	関宿台町光岳寺	「奉供養庚申」「元禄[]巳天〇月」

(11-2 は発刊後、石川博司氏のご教授による 2020 年 12 月 16 日

46-2 は、石田年子氏のご教授による 2020 年 12 月 25 日)